

Title	人間生成論研究序説 : 自然・美・ミメーシス
Author(s)	久保田, 健一郎
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44828
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	久保田 健一郎
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 18329 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	人間生成論研究序説 — 自然・美・ミメシス —
論文審査委員	（主査） 教授 平沢 安政 （副査） 教授 秦 政春 助教授 藤川 信夫

論文内容の要旨

近年、近代批判の浸透に伴い、近年、教育学は自らの学問的根拠を揺さぶられている。近代批判は、教育学に限らず、様々な学問領域において見られるわけだが、教育学はその影響を最も強く受けている分野の一つであろう。何故なら、教育学はまさに近代の歴史的構成物と考えられるからである。よって、教育学が、近代批判を肯定的に受け止めた場合、自らの学問的根拠を喪失し、教育の終焉という結論を導き出すことも考えられるのである。

しかし、近代を通過することで、制度的にも、観念的にも、教育という巨大な建造物が私たちの目の前にそびえ立っているという事実を認めるならば、そのような結論が安易であることは明らかであろう。とすればむしろ、教育学に求められるのは、自らの地盤を喪失しつつも、それを再構成していく力を考えていくといった両義的な試みであろう。

そこで重要となるのは以下の三つの問いである。教育学が近代批判によって喪失する自らの根拠とは何か、教育学は自らの根拠を喪失しながらもいかにして再構成されるのだろうか、そして、再構成された後の教育学はどのような姿で現れてくるのだろうか。

第一部では、上述の最初の二つの問いに対して、基礎論的に解答を与えていく。まずは、教育学が近代批判によって喪失するのは、近代の人間中心主義による「自然」支配という力であることを明らかにする。その「自然」支配とは、ルソーに特徴的なように、あからさまに「自然」を抑圧するものではなく、むしろ「自然」を賛美することで、人間の力を超えるものを許さないという性格を持つものである。本研究では、この「自然」支配によって構成された教育学を、形成の教育学と名づける。次に、その形成の教育学が有効性を失った後には、人間の関心を超えて生じるミメシスによる美的経験を軸とした生成の教育学が重要となると考えた。この生成の教育学は、こうしたミメシスによる美的経験によって、「自然」に痕跡が与えられ、欲望の構造に新たな層が書き込まれることで、人間の生がより豊かなものとなる姿を描き出すことができる。

第二部では、第三の問いに対する回答として、第一部で基礎理論として提示した生成の教育学の可能性が具体的にどのような姿で現れてくるのかを、二つの芸術作品の事例をもとにして描き出していく。まずは、三島由紀夫の『仮面の告白』の解釈から、ミメシスによる学習について論じ、その小説の主人公が存在者との関心を超えた関係を積み重ねることで、美的に生成していく姿を描き出していく。次に、F・トリュフォーの映画『野性の少年』の解釈から、教育する側から教育される側に向けられるミメシスについて論じ、教育者がミメシスすることによって自ら

の教育観を揺さぶられながらも再構成していく姿、さらには教育する側のみならず教育される側も成長していく姿を描き出していく。

論文審査の結果の要旨

近代という時代の歴史的構築物としての教育と教育学は、近年の近代批判によって、自らが依って立つ基盤を揺さぶられている。本研究は、そうした状況を踏まえ、第一章ではまず、教育学が近代批判によって喪失することになる自らの根拠とは何かという問いを立て、近代の教育概念を構成する人間中心主義という力と、「自然」支配という思想的基盤の存在を明らかにしている。第二章では、教育学は近代批判の後にいかにして再構築されていくのかという問いを立て、近年ドイツの哲学と教育学において注目されているミメーシス概念を取り上げ、人間中心主義に基づく形成の教育学を、ミメーシスを梃子にしながら、生成の教育学へと転換する可能性を示唆している。第三章では、再構築された後の教育学はいかなる姿で現れるのかという問いを設定し、教育にミメーシス概念を導入した後の具体的な学習と教育的関係の姿を、三島由紀夫の『仮面の告白』と F. トリュフォー監督による映画『野生の少年』という芸術作品の中に探求している。

本研究の成果は、近代教育批判というルーティーンを継続するか、あるいは、近代教育学をより強固な形で補強するかといった選択肢しかもたない今日の教育哲学をめぐる研究状況の中で、この閉塞状況を突破する具体的な方向性を指し示すものとして高く評価される。

以上、当論文は、問題設定の現代性、論理的展開の精緻性、問題解決の斬新さと具体性という点から、博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。